

エンゲルスの一九世紀末イギリス労働運動論

富 沢 賢 治

「真に全般的な労働運動が当地〔イギリス〕におこるのは、イギリスの世界独占がやぶれたことが、労働者に感得されるようになるときだけである」(エンゲルス、一八八三年)。

一九世紀末におけるイギリス労働運動・社会主義運動のルネッサンス期を、世界資本主義およびイギリス資本主義の変容との関連で、どう理解すべきかという問題は、イギリス労働運動史・社会思想史・研究における一つの大きな課題をなしている。この課題にたいする最近のわが国の研究者によるとりくみにも意欲的なものがみられる。しかも研究にさいしては、当代の労働運動・社会主義運動の卓越した理論的指導者たる晩年のエンゲルスの

発言に言及されることが多い。しかしながらそれらの言及は、エンゲルスの個々の断片的な発言にかなするものが多く、そこから彼の労働運動論の全体像を把握することは困難である。状況変化の把握にすぐれた能力をもっていた「將軍」エンゲルスが、一九世紀末の資本主義の変化をどう把握し、それに対応して階級闘争の戦略・戦術にどのような改変をもたらしただか、という問題については、すでに若干の論者による考察がある。⁽¹⁾本稿は、この問題をイギリス労働史にそくして、さらに詳細にさらに掘下げて、考察しようとするものであり、その目的は晩年のエンゲルスによる世紀末イギリス労働運動論の全体像を把握することにある。

エンゲルスのイギリス労働運動論は大きく三つの時期

に区分されうる。第一の時期は一八四八年以前で、『イギリスにおける労働者階級の状態』(一八四五年)とチャールティスト運動にかんする若干の論文が、この時期の主要著作となる。第二の時期は、四〇年代におけるチャールティスト運動の崩壊から七〇年代にいたる時期(エンゲルスのいわゆるイギリス・プロレタリアートの「四〇年間の冬眠」の時期)で、主として第一インタナショナルとの関連でイギリス労働運動論が展開される。⁽²⁾第三の時期は、八〇年代以降で、そこでは主としてイギリスにおける労働運動の「四〇年間の冬眠」が反省され、八〇—九〇年代におけるその「覚醒」が認識され、さらにその将来が展望される。本稿は、この第三期を考察対象としている。

ところでこの第三期、すなわち八〇—九〇年代におけるエンゲルスのイギリス労働運動にたいする評価は、八〇年代と九〇年代とで(一八八九年を境に)大きく変化している。彼は、八〇年代に書かれた多くの手紙のなかで「イギリスには労働運動は存在しない」と述べ、チャールティスト運動の崩壊後イギリス労働運動は「冬眠」に入ったと慨嘆している。ところが一八八九年には彼は、

新組合運動にふれながら、「運動はついに動きだした」と述べ、翌九〇年には、メーデー・デモンストレーションに言及しながら、イギリスのプロレタリアートがついに「冬眠」から目覚めたのだと評価し、さらに九三年には、「当地ではうまくいっている」とすら断言するにいたるのである。

本稿では、まずその前半部分で、主として八〇年代のエンゲルスが「冬眠」の原因をどう理解していたのかという問題を考察し、次にその後半部分で、主として九〇年代の彼が労働運動の「覚醒」をどう認識し、将来におけるその発展をどのように展望していたのかという問題を考察する。

(1) 正田庄次郎「議会制度とエンゲルス」『三田学会雑誌』五三巻八号(一九六〇年)。

平田清明「晩年のエンゲルス——マルクス主義研究序説——」『経済科学』九巻三号(一九六二年)。

浅井啓吾「晩年のエンゲルスにみるドイツ革命の戦術論」『経済系』六八号(一九六六年)。

欧米の研究状況にかんしては、F. Nova, *Friedrich Engels, His Contributions to Political Theory*, London 1968. およびその Bibliography (pp. 113—115) 参照。

晩年のエンゲルスを研究対象としたモノグラフは、洋の東西をとわず、すくなくとも量的には貧困である。

(2) 第一期と第二期におけるエンゲルスのイギリス労働運動論にかんしては、左記の文献参照。

H. Collins & C. Abramsky, *Karl Marx and the British Labour Movement, Years of the First International*, London 1965. 参考書の詳細な Bibliography (pp. 315—344)。

U. Herrmann, *Der Kampf von Karl Marx um eine revolutionäre Gewerkschaftspolitik in der I. Internationale, 1864 bis 1868*, Berlin 1968.

飯田鼎『マルクス主義における革命と改良——第一インターナショナルにおける階級・体制および民族の問題——』一九六六年。

戸塚秀夫「エンゲルス労働者調査の意義と限界」『経済評論』一九六八年四月号。

一 労働者大衆の「四〇年間の冬眠」

1 「冬眠」とその原因

チャーティスト運動崩壊後、イギリスのプロレタリアートが「冬眠」状態におちいったというエンゲルスの認識は、一八七〇年代・八〇年代に彼が外国の同志にあて

たイギリス通信に如実に示されている。いわく、「現在のところ当地には〔ヨーロッパ〕大陸的な意味では本来的な労働運動はなんら存在しない」(一八七九・六・一七・ベルンシュタインへの手紙⁽¹⁾)。プロレタリアートは「イギリスでは一八四八年の大失敗後、無関心へとおちこみ、そして結局、労働組合の個々の賃上げ闘争をのぞけば、ブルジョワ的搾取へ屈服してしまった」(一八八一・一一・三〇・ベルンシュタインへの手紙⁽²⁾)。「君は当地に真にプロレタリア的な運動がおこったと聞かされても、けっして本当だと思っではいけない」(一八八三・八・三〇・ペーベルへの手紙⁽³⁾)、等々。

では、このような「冬眠」の原因を、エンゲルスはどのように説明するのであろうか。彼によれば、イギリスのプロレタリアートが政治的に無力であることの直接的な原因は、彼らが彼ら独自の労働者政党を結成していないからである。

なるほどすでに一八六〇年代には労働者の国際的な団結を目的とする第一インターナショナルが設立されていた。しかしながら、われわれは、この第一インターナショナルの主要目標の一つが各国におけるナショナルな労働者

政党の設立にあつたことを想起する必要がある。そしてそのさい、資本主義世界の創造主たるイギリス本国における労働者政党的設立がもっとも強く要請されていたことも当然のことといえよう。ところが、エンゲルスによれば、イギリスにおける労働者政党的設立こそ、もっとも困難な課題だったのである。なぜか。彼はすでに「イギリスの選挙」(一八七四年)のなかで、チャーティスト党の壊滅以来イギリスになんらの労働者政党的も存在しない理由として、労働者階級が大工業の巨大な発展からの利益のわけまえを受取っていること、および支配階級が、チャーティストの諸要求を実行するなどして、労働者階級に譲歩していることを、あげている。そしてこれらのことを可能ならしめる条件を「イギリスの世界市場支配」にあるとみなしているのである。⁽⁴⁾

「冬眠」の究極的原因としてエンゲルスが強調してやまない一九世紀中葉におけるこの「イギリスの世界市場支配」は、「自由貿易」というスローガンのもとで、実は「帝国主義」的政策あるいは植民地主義と密接な関連をもっていた。⁽⁵⁾ イギリスのプロレタリアートにとってもっとも重要な問題であるべきこの問題について彼ら自身

はどう考えていたのであるか。この点にかんするカウツキーの質問にたいしてエンゲルスは、一八八二年九月一二日付の手紙で、こう答えている。「君は植民地政策について、イギリスの労働者はどう考えているかと質問する。ところで、彼らの考え方は全体としての政治についての彼らの考え方とまったくおなじなのだ。つまり、ブルジョワが考えたとおりに考えている。当地には労働者政党的は存在しない。あるものはただ保守党と自由・急進党だけだ。そしてイギリスの世界市場と植民地の独占という饗宴に、労働者も楽しくご相伴しているのだ。」⁽⁶⁾

かくしてエンゲルスは、一八八三年八月三〇日付のペーベルの手紙において、「世界市場支配への参加がイギリス労働者の政治的無力の経済的基礎であつたし、またいまでもそうである。この独占の経済的搾取のさいにブルジョワのしっぽとなり、しかもその利益にあずかっているから、彼らが政治上では『大自由党』のしっぽであるのは自然の理である」と結論するにいたるのである。⁽⁷⁾ このようにイギリスの世界市場支配が「冬眠」の根本原因であるとするならば、当然のことながら、「世界市場独占の崩壊と労働者によるその自覚とが彼らの「覚醒」の

ための基本的な要因となる。だからエンゲルスは、同じ手紙のなかで、「真に全般的な労働運動が当地におこるのは、イギリスの世界独占がやぶれたことが、労働者に感得されるようになる (fühbar werden) ときだけである⁽⁸⁾」と断言するのである。

以上の考察によりわれわれは、八〇年代のエンゲルスが、「冬眠」の近因を労働者政党の欠如に求め、遠因をイギリスの世界市場独占に求めていたこと、および、その逆の表現にすぎないが、「覚醒」の基本条件を世界市場独占の崩壊と労働者政党の設立とに求めていたことを、知りうるであろう。

次にわれわれは、このような「冬眠」状態がなぜイギリスで成立したのかという問題にたいするエンゲルスの歴史的分析をより詳細に考察することにしよう。

2 「冬眠」の原因にたいする歴史的考察

エンゲルスは、「一八四五年と一八八五年のイギリス (一八八五年) と題する論文で、過去四〇年間のイギリス史をふりかえり、その間の労資関係を分析している。以下、彼の所論を考察しよう。

エンゲルスによれば、一九世紀イギリス労資関係史は三つの時期に区分されうる。第一期は一八四八年以前の時期、いわばイギリスにおける「三月前期」^{フオケ・メルク}であり、第二期は、チャーティスト運動崩壊後の約四〇年間、エンゲルスの言う「冬眠」の時期であり、そして第三期は、いわゆる「大不況期」以後のイギリス資本主義の変容期である。

第一期は、エンゲルスによって、危機の時代としてとらえられている。なぜならば、彼によれば、当時のイギリスでは、労働者大衆によるチャーティスト運動が大多数の小市民によって支持されており、そこにさらに一八四七年の商業恐慌とアイルランド飢饉が加わり、イギリスは革命の危機に直面していたからである。だが「一八四八年のフランス革命がイギリスのブルジョワジーを救ってくれた」⁽⁹⁾。イギリスの小市民層は、フランス労働者の社会主義的な諸宣言に恐怖を感じ、チャーティズム運動を解体させてしまったのである。エンゲルスはこのように第一期の特徴を把握している。

かくして労資関係史は第二期にはいる。チャーティズム運動崩壊後の四〇年間は、ブルジョワジーが全線にわ

たつて勝利を始めた時代であった。いわゆるこのイギリス史の「黄金時代」を導いた指導階級は産業ブルジョワジーであり、この時期においてイギリスの「国民を代表した階級」は、プロレタリアートではなくて、産業ブルジョワジーであった。エンゲルスはこう明言しているのである。⁽¹⁰⁾

彼によれば、第一次選挙法改正は、地主階級にたいする「総資本家階級」の勝利であったが、穀物関税廃止はとりわけ「産業資本家」の勝利を意味し、そして「自由貿易が意味するところは、いまや国民を代表する階級すなわち産業資本家の利益に同調してのイギリスの内外金融商業政策全体の改変であった。」産業ブルジョワジーは「力づよい、堅実な常識と因習的諸原理にたいする軽蔑とをもって」イギリスを「世界の工場」とすべく真剣に仕事にとりかかった。彼らはまた、労働者階級の協力なしには、国民にたいする完全な社会的・政治的支配をものにするにはできないということを理解し、人民憲章の諸要求の実現に努力したのみならず、工場法・労働組合・ストライキ等をも認めるようになった。こうして四〇年代以降、労資の敵対的關係は徐々に緩和されてき

た。イギリスにたいする産業ブルジョワジーの支配の結果は驚くべきものであった。産業の巨大な昂揚・輸出入の発展・資本蓄積量の増加は古今未曾有のものとなった。エンゲルスは産業ブルジョワジーの「黄金時代」をこう評価したのであった。⁽¹¹⁾

産業ブルジョワジーにとつての「黄金時代」は、しかしながら、プロレタリアートにとつては彼らの「冬眠時代」を意味する。エンゲルスはこの時代の「イギリスにおける労働者階級の状態」をどのように評価しているのだろうか。一八四五年の『イギリスにおける労働者階級の状態』においてあれほど労働者階級の悲惨さを強調したエンゲルスは、ここではむしろ一八四八年以後彼らの状態に改善された面があるということを強調している。すなわち、彼は、労働者大衆にとつて貧困と生活不安の水準は昔どおりに低い、と述べながらも、「労働者階級の二つの被保護部門」に恒常的な改善がみられる点をとくに強調する。⁽¹²⁾ その第一の部門は「工場労働者」である。比較的合理的な標準労働日が法律的に確定したことによつて、彼らの体格が相対的に回復するなどして、「彼らの状態はうたがいのなく一八四八年以前の状態よりもよくな

っている」とエンゲルスは評価する。第二の部門は「大きな労働組合」に属する労働者である。「彼らの状態は、一八四八年以来うたがひもなく大いに改善された。……彼らは労働者階級内の貴族をなしている。彼らは比較的安楽な状態を獲得しおわせ、この状態を究極的なものとして是認している。彼らは……資本家階級にとって、たいへん好ましい、すなおな部下なのである。」そして、労働者階級内にこのような階層を出現させた経済的基盤を、エンゲルスは、「世界の工場」イギリスの世界市場支配においてみるのである。⁽¹³⁾

かくして、「冬眠」の原因にかんする歴史的考察の結論として、エンゲルスは次のように述べる。「真実はこうである。イギリスの工業独占がつづいていたかぎり、イギリスの労働者階級はある程度まで、この独占の利益のわけまえにあずかっていた。この利益は彼らのあいだではなはだ不平等に分配された。最大のわけまえをふところにいれたのは特権的な少数分子であったが、大衆でさえも、すくなくともときおりは一時的にそのわけまえをえた。そしてこれが、なぜイギリスではオーウェン主義の終熄いらい社会主義がなかったのか、ということの

理由である。⁽¹⁴⁾このような結論を前提に、一八八五年のエンゲルスは、社会主義復活にかんして次のように予測するのである。「独占がくずれるにしたがって、イギリスの労働者階級は、この特権的地位を失うであろう。彼らはおしなべて……いつかは外国労働者と同一水準におかれる日に出会おうであろう。そしてこれが、なぜイギリスでもふたたび社会主義がおこるようになるかというこの理由である。⁽¹⁵⁾」

では、世紀末におけるイギリスの独占的地位の崩壊は、エンゲルスによってどのように把握されていたのであろうか。

3 「世界市場と植民地の独占」の終焉

晩年のエンゲルスが世紀末における世界資本主義の変質を歴史的・理論的にどう把握していたかという一般の問題にかんしては、すでに平田清明氏による研究⁽¹⁶⁾があるので、以下においてはわれわれは、行論の関係上、八〇年代のエンゲルスが、イギリス資本主義の変質をどのように把握していたかということに問題を限定して考察をすすめることにしよう。

一八八四年のエンゲルスはイギリス経済の変質を次のようにとらえている。「当地でもまた産業は異なった性質をおびるようになった。一八七〇年以來、アメリカの競争とドイツの競争とが世界市場におけるイギリスの独占に終焉をもたらしつつある現在では、一〇年周期(ハの景気循環)は打ちこわされてしまったようにみえる。一八六八年以來、基幹産業部門では不況が一般的になっており、生産の伸びは遅くなっている。そして今やわれわれは当地とアメリカとの両国において新しい恐慌のまぎわに立っているようにみえる。しかもここイギリスにおいては、その恐慌に先立つ繁栄期がみられないのである。」⁽¹⁷⁾エンゲルスによれば、このようなイギリス資本主義の変質こそが、八〇年代初頭に社会主義的諸集団をうみだした基本的要因である。⁽¹⁸⁾

「一八四五年と一八八五年のイギリス」においては、エンゲルスは、「イギリスの現行社会体制の要石」であるイギリスの工業独占がいまや決定的に打破され、一八七六年以來、支配的な全産業部門が慢性的不景気状態にある、という事実を指摘し、イギリス資本主義に「一つの転機」(eine Wendung)がやってきたことを、強調し

ている。⁽¹⁹⁾

一八八六年一月のエンゲルスのペーベルへの手紙においては次の諸点が確認されている。⁽²⁰⁾

- (a) 過剰生産が市場を圧迫しはじめてからいまや八年目になるが、それはますます悪化しつつある。
- (b) 状況が質的に変化している。世界市場でイギリスが強い競争相手をもつようになってからは、今まで知られているような意味における恐慌の時期は終わってしまった。

(c) この新しい時期(Periode)にかんして二つのことは確かである。第一に、この新しい時期は、一〇年周期恐慌の時期に比べれば、旧社会の存続にとつてはるかに危険な時期である。第二に、この新しい時期においては、好況期がもどったときでも、イギリスがその好況によって影響をうける程度は、イギリスが一国だけで世界市場からその最上の部分をすくいとつていた従来(の)時期に比べれば、はるかに小さいであろう。

(d) 上述のことがイギリスにおいて明らかになったときにこそ、社会主義運動はここで、真にはじまることになる。しかしそれ以前にはじまることはなからう。

このように世紀末イギリスの新状況は、エンゲルスによって、世界市場独占の崩壊→イギリス経済の質的変化(一〇年周期景気循環期の終焉・慢性的不景気状態)→社会主義運動の再生→資本主義社会にとっての危機的な時期への移行、として把握されるにいたるのである。

以上の考察によって、われわれは、エンゲルスがイギリスの「黄金時代」における労働運動の脆弱性の根本原因を「世界の工場」イギリスの世界市場支配に求めていることを確認できよう。イギリス産業資本の発展を考察するにさいして、その世界市場支配・植民地主義との関連が軽視されてはならないことは、近年のイギリス経済史研究がとくに強調する点であるが、われわれは、エンゲルスの指摘することからして、産業資本主義期におけるイギリス労働運動を考察するにさいしてもまた、イギリスの世界市場支配・植民地主義との関連が重要な研究視角をなしていることを示唆されるのである。いわゆる「自由貿易の帝国主義」という問題提起は、たんに資本側の運動のみ問題とするのではなく、当然のことながら、労働の側の運動をもまたその研究対象としなくては

はならないであろう。そしてこの領域においては、今後明らかにされるべき問題が多く残されているのである。

- (1) Karl Marx u. Friedrich Engels, *Werke*, hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED (以下 *MEW* と略称) Bd. 34, S. 378.
- (2) *MEW*, Bd. 35, S. 237.
- (3) *MEW*, Bd. 36, S. 57.
- (4) *MEW*, Bd. 18, S. 496.
- (5) 『マルクス・エンゲルス選集』大月書店版(以下『マルクス選集』と略称)一二巻、三六二ページ。
- (6) この点にかんする最近の研究状況の紹介については、宮崎輝一「自由帝国主義——問題の開拓——」『思想』一九六七年五月号、参照。マルクスによる問題点の指摘については、富沢賢治「マルクスと植民地主義——植民地主義の歴史的役割——」『思想』一九六八年八月号、参照。
- (7) *MEW*, Bd. 35, S. 357.
- (8) *MEW*, Bd. 36, S. 58.
- (9) *ibid.*, S. 58.
- (10) F. Engels, *England 1845 und 1885*. *MEW*, Bd. 21, S. 191. 『マルクス選集』一七巻、一八三ページ。
- (11) *ibid.*, S. 192. 同上書、一八三ページ。同様な指摘は、マルクス『自由貿易問題』英語版へのエンゲルスの序文「保護関税と自由貿易」(一八八八年)にもみられる。「長い、はげしい闘争のうちに、イギリスの産業資本家は勝利

した。彼らは当時すでに事実上国民の指導的階級であり、しばらくの間はその利益が国民的利益と一致していた階級であった。」*MEW*, Bd. 21, S. 362. 『フ・エ・選集』二巻、四〇五—六ページ。

(11) *MEW*, Bd. 21, SS. 192—3. 『フ・エ・選集』十七巻、一八三—六ページ。

(12) *ibid.*, SS. 194—5. 同上書、一八六—七ページ。

(13) 「労働貴族」発生論にかんするこのようなエンゲルスの見解を批判的に発展させた一研究としては、高橋克嘉「一九世紀イギリスの国際労働移動——『賃労働と世界市場』の一領域——」『政経論叢』一四巻二号（一九六五年）、参照。また最近のE・J・ホブズボームは、一八四〇年代以前にすでに労働貴族層が存在していたのではないかとする見解を述べた（E. J. Hobsbawm, *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, London 1964. 日本語版への序文、一八六八年、鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』一九六八年、Vページ、参照）。

(14) *MEW*, Bd. 21, S. 197. 『フ・エ・選集』一七巻、一九〇—二ページ。

(15) *ibid.*, S. 197. 同上書、一九〇—二ページ。

(16) 平田清明、前掲論文、一一六—二〇ページ、参照。

(17) エンゲルスのA・バーネルへの手紙（一八八四・一—一八）。*MEW*, Bd. 36, SS. 87—8.

(18) *ibid.*, SS. 88.

(19) *MEW*, Bd. 21, SS. 195—6. 『フ・エ・選集』一七巻、一八八—九ページ。

(20) *MEW*, Bd. 36, S. 427.

二 労働者大衆の覚醒

エンゲルスによれば、一九世紀末世界市場におけるイギリスの独占的地位の喪失が、イギリス国内に社会主義を再生させたことになる。では彼は、この社会主義の再生とその発展をどのように把握していたのであろうか。以下、われわれはこの問題を考察しよう。

1 ドック・ストライキ（一八八九年）とメーデー・デモンストレーション（一八九〇年）

イギリスのプロレタリアートは、一八九〇年五月四日のメーデー・デモで、長い冬眠から目覚めた、とエンゲルスは言う。しかし、彼らは、ある春の日曜日の朝、突然目覚めたわけではない。このメーデー・デモの意義を理解するためには、「ロンドンの五月四日」（一八九〇年）においてエンゲルスが主張しているように、その前史を知らねばならない。

(A) 新労働組合運動の昂揚

メーデー・デモの基礎に新労働組合運動の盛り上がりがあることを、まず第一に強調するエンゲルスは、デモの歴史を一八八九年のロンドンの一般労働者の運動から始めている。彼によれば、一八八九年初頭から「世界で最大の、かつもっとも貧困な労働者地区」であるイースト・エンドは、しだいに動きつつあったが、四月一日には「ガス労働者および一般労働者組合」が設立され、夏には、この組合の協力のもとに、ロンドン港のドック・ストライキがおこり、それがロンドン東部の最下層の労働者を沈滞からゆりおこし、不熟練労働者のあいだに、つぎからつぎへと労働組合が設立されるにいたった。しかもこれらの新労働組合は、第一に、旧労働組合が熟練労働者を組合員とする排他的組合であるのにならして、同職者をだれでも参加させる開放的組合であり、第二に、旧労働組合がたんなる「疾病金庫および埋葬金庫」に墮してしまっているのにならして、主として「ストライキ組合としてストライキ金庫」であり、そして第三に、旧労働組合が保守的で、社会主義を排斥しているのにならして、社会主義者を指導者にしようとしていた。⁽¹⁾このよ

うな新労働組合の運動の昂揚を示す象徴的事件がドック・ストライキであったといえよう。

エンゲルスによれば、イースト・エンドのドック労働者の組織化は非常に重要な意味をもつ。その理由として彼は、第一に、イギリスのなかでも、もっとも多くの一般労働者がかかえているイースト・エンドで、ドック労働者という最下層の労働者が組織化されるならば、彼らよりも上層にある労働者もやがて組織化され、第二に、地方の労働者もロンドンでのこの例にしたがうようになるだろうということ⁽²⁾をあげている。

すでに争議発生直後にこのような予見をしていたエンゲルスは、争議勝利後の一〇月になると「ブルジョワジーの隠退」と題する論文を書き、このストライキこそ、イギリスの指導的階級としてのブルジョワジーの時代が終わり、そしてイギリスを代表する階級がブルジョワジーからプロレタリアートへと移行したことを示すものだと述べている。なぜならば、ドック独占体やロンドン港の封建的制度を打倒するという課題は、その犠牲となっているブルジョワジーが本来果たすべきものであるにもかかわらず、「ブルジョワジーは、その多くのものがこの

愚行の代価を支払わなければならないのに、独占に屈服し、結局はプロレタリアートがこの「ドック貴族」に挑戦せざるをえなくなったからである。このことは「ブルジョワジーが自らの本来の役割を労働者にゆずって隠退した」ことを意味する。エンゲルスはこう主張するのである。⁽³⁾

このように労働者大衆の新労働組合運動への結集を高く評価するエンゲルスは、一八八九年の年末、ゾルゲへの手紙で、「運動は、かたちのうえではさしあたり労働組合運動であり」、その意味では、直接的に社会主義的なものとは言えないが、「運動はいまやついに動きだしている」と評価するにいたるのである。⁽⁴⁾

(B) 一八九〇年のメーデー・デモ

一八九〇年の年頭にあって、「大衆は動きつつあり、もはや彼らをおしとどめることは不可能である」と述べていたエンゲルスは、メーデー・デモの行なわれるほど二週間前(四月一九日)の手紙で、ゾルゲにこう書き送っている。社会主義運動の「表面だけを見ているものは、不統一と個人的闘争ばかりだ、と言うだろう。しかし運動は、この表面の下で進展し、ますます広汎な層をつか

んでいる、しかも多くはこれまで動かないでいた最下層の大衆のあいだで。そしてこれらの大衆が突如として自己を発見し、自分たちこそが動きつつある巨大な大衆なのだということのわかる日はもうそう遠いさきのことではない。その日には、いっさいの瑣事といさかいたが、たちまちのうちに片付けられてしまうのだ。」⁽⁶⁾ エンゲルスが労働者大衆の覚醒をどれほど待望していたか、われわれはこの文面から理解できるであろう。このような雰囲気の中で彼は五月四日を迎えたのである。

このロンドン・メーデー集会は二つに分裂して行なわれた。一方の集会は、新労働組合運動のもりあがりを基礎にもつメーデー実行中央委員会主催のものであり、他方の集会は、旧労働組合の代表者で構成されているロンドン労働組合評議会と社会主義的セクトである社会民主連盟との奇妙な連合による集会であった。エンゲルスの表現を借りれば、「一方の側には、賃労働のさきが見えない保守的な労働者と、それとならんで、狭量な、だが支配欲の強い社会主義的セクトがあり、他方の側には、あたらしく運動に入ってきた労働者大衆があった。」⁽⁷⁾ この集会は、エンゲルスの評価によれば、中央委員会側の

集会の圧倒的な成功をもって終わった。「一方の側には、ギルド気質からまだ完全にはぬけていない労働組合と、ごくけちくさい同盟者をたよりにしている心の狭いセクトとによって代表される停滞があり、他方の側には、ふたたび目を覚ましたイギリス・プロレタリアートの、いきいきとした自由な運動がある⁽⁸⁾」と彼は評価したのである。

このデモの意義としてエンゲルスが強調するのは、旧労働組合と社会主義的セクトとの連合にたいする新労働組合の勝利である。彼は労働貴族と社会主義的知識人セクトというエリート層にたいする労働者大衆の勝利をもって、イギリス労働運動史における大きな変質とみただであった。だから彼は、「満四〇年間大自由党の尻尾と投票家畜となってきたイギリスのプロレタリアートは、ついにあらたな独立の生活と行動とをとれるまでに成長した。……その長い冬眠はついにやぶられたのである」⁽⁹⁾とこれを評価し、さらに、「多くの人が予期するよりも短期間内に、イギリスのプロレタリア軍は……一致団結し、立派に組織される……であろう」と予測したのである⁽⁹⁾。

だが労働者政党の設立というイギリス・プロレタリアートの長年にわたる政治的課題の解決は、イギリスの世界市場独占の終焉というその経済的基盤の変質と同時にいとも容易に自然発生的に達成されたわけではけっしてなかった。以下、この問題にかんするエンゲルスの見解を考察することしよう。

2 社会主義的諸セクトと大衆との分離

民主連盟（一八八一年設立、一八八四年に社会民主連盟と改称）・フェビアン協会（一八八四年設立）・社会主義者同盟（一八八四年設立）というような社会主義的集団が、一八八〇年代初頭につきつぎに設立された。だがエンゲルスは、これらの集団が、大衆的基盤を欠くゆえに、すべてセクトにすぎないと断じている。

一八八六年八月一日付ペーベルへの手紙でエンゲルスは次の諸点を指摘している

(a) 「当地では、それやこれやがあっても、まだなにもおこっていないのと同然だ。オーウェン時代のように、社会主義的セクトはたった一つだなどとはとても言えない。人の頭数だけセクトがあるのだ。」⁽¹⁰⁾

(b) 「社会民主」連盟は、すくなくとも一つの綱領とある種の規律をもっているが、背後の大衆のなかにはなに一つもっていない。幹部連は野心満々の政治的冒険家で、その新聞『ジャステイス』は、連盟の世界的な威力と意義とについて無類の大嘘をついている。⁽¹¹⁾

(c) 「社会主義者同盟は危機的狀態にある。モリスは感傷的空想家で……革命という空文句にはまりこんで、無政府主義者の犠牲になってしまった。バックスは……哲学者流に独特の社会主義をでっちあげて、これを本当のマルクスのな理論だと考え、そのために多大の弊害をひきおこしている。⁽¹²⁾」

このような状況にたいして、エンゲルスは、独自の階級的綱領をもったイギリス労働者政党を創立することこそ緊急の課題であると主張するのである。⁽¹³⁾

一八八〇年代における社会主義的諸集団の発生・大衆的基盤の欠如からくるそれら集団のセクト化・各セクト間の争いといった状況は、九〇年代になると、労働者大衆の運動のもりあがりとともに、克服される傾向をみせはじめた。

一八八九年二月七日付ゾルゲへの手紙で、「よしん

ばその国特有の生活諸關係からうまれた最良の理論をもち……比較的よい指導者をもっている場合でも、大国民に理論一点ばりのつめこみをそう簡単にはやれないことは、当地を見れば明らかである⁽¹⁴⁾」と述べていたエンゲルスは、翌年の四月一九日付ゾルゲへの手紙ではこう書いている。「古くから政治運動や労働運動のおこなわれていたこの山には、いつも、伝統的にうけつがれたがらくたの山がある。……個々の職業間に嫉妬ざたがあるが、これはひそかに指導者の手と頭のなかで直接の敵視と争闘にまで尖鋭化する。……要するに摩擦をかさねているのだ。その間にあつて、社会主義者同盟は、直接的に革命的でないものをすべて見くだしている……。それから「社会民主」連盟は、あいもかわらず、自分以外はとんまかへばにすぎないような身振りだ。だが彼らこそが、運動の新しい進展によって、またもや唯一の添えものになつてしまったのだ。⁽¹⁵⁾」そして一八九三年になると彼はゾルゲに、「当地では非常にうまくいっている。大衆はうたがいのもなく動いている。……その一番よい証拠は、古いセクトが地盤を失つて、方向を変えずにはおられないことだ⁽¹⁶⁾」と書き送っている。

一八九二年八月一二日付カウツキーへの手紙で、エンゲルスは、社会民主連盟のセクト性について、「社会民主連盟は、マルクス主義を一つのドグマに骨化させ、そしてオーソドックスなマルクス主義でないすべての労働運動を拒否することによって……それは自己を一つのセクトにする以外にはなにもなしえなくしている」と述べ、その教条主義を批判すると同時に、「大自由党の尻尾になっているフェビアン」にたいしても、「フェビアンたちは現実的な障害になっている」として、その修正主義的行動を批判している。⁽¹⁷⁾

つまりエンゲルスによれば、「労働者をすべてのブルジョワ政党に対する独自の独立の政党の結成にまでもってゆくこと」こそ緊急の課題であるべきなのに、一八九二年の選挙においてフェビアン協会は、労働者が自由党とむすぶように説教し、それを実行させた、というのである。⁽¹⁸⁾フェビアン協会がなぜこのような行動をとらざるをえないかという理由を、彼はこう説明する。フェビアン協会は、社会的変革の不可避性を見ぬくだけの知性はじゅうぶんもっている「知識人」集団である。彼らは、労働者が支配するという脅威にたいする憂慮においての

み一致し、そして「知識人」による指導権の確保によってこの危険を緩和しようと努力している。「革命にたいする危惧が彼らの根本原理である。」彼らの社会主義は、国家ではなくて市町村が生産手段の所有者になるべきだと主張する「自治体社会主義」である。「彼らの社会主義は、ブルジョワ自由主義の究極の、しかし不可避的な帰結としてあらわされる。」ここから、ブルジョワ政党を敵として徹底的にたたかうかわりに、彼らとなれあい、自由主義に社会主義を浸透させ、ブルジョワ政党の候補者にたいして社会主義の候補者を対立させないで、後者をひっかけたり、おどしたり、だましたりするという戦術がうまれてくるのである。⁽¹⁹⁾

フェビアン協会をこのように鋭く批判しつつも、エンゲルスは、協会が立派な宣伝文書を多くつくり出したことを評価し、⁽²⁰⁾彼らを批判することは必要であるが、このことはかならずしも彼らを敵としてとりあつかうことを要求するのではないと、カウツキーに注意している。⁽²¹⁾労働戦線統一のために、エンゲルスが、どれほど配慮していたかを、ここから読みとることができよう。

3 労働者政党の創設にむかって

一八九二年、ケア・ハーデイが、自由党の立候補者としてでなく、独立の労働者代表としてはじめて議会で選出された。翌九三年、彼を中心として、ブルジョワ政党内に依存することなく労働者を議会へ選出するという目的をもって、独立労働党が結成されたときに、エンゲルスは、「社会民主連盟もフェビアン協会も、そのセクツ的な態度の点で、地方における社会主義的な昂揚を吸いあげることができなかったから、第三党の創立はまったくよかつた」として、これを歓迎した。²³ エンゲルスの判断によれば、一八九三年には、古いセクツのなかにも労働者会員が勢力を占めてきて、労働運動の統一の機運が醸成されてきた。²³ プロレタリアートを上から解放しようとする「思い上つたブルジョワ」のフェビアンたちも、今では自由党を裏切者と呼び、次の選挙で労働者は彼ら自身の候補者をたてるべきだと主張するにいたつた。²⁴ 九四年になると、紡績労働者の保守的な労働組合指導者のなかにも、従来の見解を改めて、議会で労働者代表を送るべきだと主張するものが現われてきた。これにたいしてエンゲルスは次のように評価している。この場合、代表

を要求しているのは、労働組合であり、産業の一部門であり、階級ではない。「それにもかかわらず、それは一歩前進だ。まず最初に二大ブルジョワ政党内にたいする労働者の隷属を打破せねばならない。……一〇ほどの産業部門の代表が議席をもてば、階級意識は自然に生まれてくるだろう。²⁵」

九〇年代のエンゲルスは、労働党結成機運の醸成をこのように指摘する一方、他方では自由党解体の危機をも強調し、将来における労働党対保守党という二大政党対立を予見している。一八九二年の選挙時における彼の考察によれば、大ブルジョワジーと反穀物法同盟の息子たちは、一八五五年から一八七〇年の間にすべて保守党陣営に移り、一八八六年のアイルランド自治法問題以来、ホイッグと古い自由党員（ブルジョワと知識人）の最後の残存者もまた（dissentientあるいは Unionist Liberals として）保守党陣営に移ってしまったので、自由党の基盤は今では中・小ブルジョワジーだけになってしまった。それゆえ自由党が保守党にたいして党としてその存在を継続させるためには労働者の票を獲得しなければならぬ。そしてそのためには自由党は労働者に譲歩をする必

要がある⁽²⁶⁾。保守党・自由党にたいするこのような階級分析にもとづいてエンゲルスは、彼の死の一年前(一八九四年)に、次のように予見したのである。労働党の結成は、一定数の独立の労働者が議席を獲得したときに、いやでも達成されるであろう。自由党はこれを阻止せんとやっきになっている。金持は、現状に満足している故にすべて保守派になり、そして死滅しつつある自由党は、ますます労働者の票に依存しつつある。それにもかかわらず、自由党は、労働者は労働者の代表としてブルジョワだけを選ぶべきだ、と主張している。このような事情が自由党を死滅に追いやっていく。「彼らが最後の瞬間に非常に大胆な措置をとらないならば、彼らの死はほとんど決定的なものとなる。そうすれば、トーリー派が選挙され、自由党がじっさい実行しようとしていたことをやりとげることになる……。そしてそのときには独立の労働党の存在がかなり確実なものとなる。」⁽²⁷⁾

エンゲルスは、自由党の没落と労働党の創設をこのように予見した。彼の死後、一九〇〇年には労働代表委員会が結成され、一九〇六年にそれが労働党という名称を採用するにいたったことは、周知の事実である。だが、

イギリスの世界市場支配の崩壊が、労働党結成という媒介をへて、労働者の階級意識にまで結実するには、その後さらに長い年月が必要とされる。

以上、本稿は晩年のエンゲルスのイギリス労働運動論をデッサンしてきた。彼によれば、イギリス労働運動の脆弱性の真因は、イギリスの世界市場・植民地支配にあり、それ故また、イギリス労働運動の再生要因は、イギリスの世界市場・植民地支配の崩壊と労働者階級によるその自覚とにあった。

エンゲルスのこのような見解を今日の労働運動史研究の水準からどのように評価するか、また、エンゲルスの視点を今日の労働運動史研究にどう役立てるか(たとえば、イギリスの世界市場・植民地支配の崩壊を労働者は階級としてどの程度自覚してきたのか、という問題の分析にさいして)、等の諸問題が、本稿との関連で今後考察されるべきであろう。

(1) F. Engels, Der 4. Mai in London. MEW, Bd. 22, S. 61. 『F・エ・選集』一七巻、二〇六―七ページ。

(2) ベルンシュタインへの手紙(一八八九・八・二二)。

- MEW, Bd. 37, SS. 260—1.
- (3) MEW, Bd. 21, SS. 385—6. 『フ・ヒ・選集』一七巻、
一〇一—一二ページ。
- (4) MEW, Bd. 37, S. 320.
- (5) シェリタターへの手紙(一八九〇・一・一一) *ibid.*,
S. 340.
- (6) *ibid.*, SS. 394—5.
- (7) F. Engels, Der 4. Mai in London. MEW, Bd. 22,
S. 64. 『フ・ヒ・選集』一七巻、一二—一三ページ。
- (8) *ibid.*, S. 64. 同上書、一二—一三ページ。
- (9) *ibid.*, S. 65. 同上書、一二—一三ページ。
- (10) MEW, Bd. 36, S. 509.
- (11) *ibid.*, S. 509.
- (12) *ibid.*, S. 510.
- (13) ソルゲへの手紙(一八八七・五・四)。 *ibid.*, S. 649.
- (14) MEW, Bd. 37, S. 320.
- (15) *ibid.*, S. 394.
- (16) 一八九三・三・一八・付の手紙。 MEW, Bd. 39, S.
53.
- (17) MEW, Bd. 38, SS. 422—3.
- (18) カウツキーへの手紙(一八九二・九・四)。 *ibid.*, SS.
446—7.
- (19) *ibid.*, S. 447. およびソルゲへの手紙(一八九三・一・
一六)。 MEW, Bd. 39, S. 8.
- (20) ソルゲへの手紙(一八九三・一・一八)。 *ibid.*, S. 8.
- (21) カウツキーへの手紙(一八九二・九・四)。 MEW,
Bd. 38, S. 448.
- (22) ソルゲへの手紙(一八九三・一・一八)。 MEW, Bd.
39, S. 7.
- (23) ソルゲへの手紙(一八九三・三・一八)。 *ibid.*, S. 53.
参照。
- (24) ソルゲへの手紙(一八九三・一・一一)。 *ibid.*, S.
166.
- (25) フレハーノフへの手紙(一八九四・五・一一)。 *ibid.*,
S. 248.
- (26) ヴーヤルへの手紙(一八九二・七・五)。 MEW, Bd.
38, SS. 384—5.
- (27) ソルゲへの手紙(一八九四・五・一二)。 MEW, Bd.
39, SS. 244—5.

(一橋大学助手)